



獨吟

田中氏  
常能

地乃すまごころん此鐘也花乃著  
七海とひびくよ友乃杏陰  
かゝきひ声の響る春にけり  
さあゝさゝとさゝる村を  
夕嵐藉よのらりて一とあひき  
よもあをしく跡乃くき雲

朝乃月打そひ乃名も彩花て  
猫能足より霧ぞこぼりし  
初時多暎よからひて娘乃多  
山内村も家かう乃名の鉢  
若解橋きうしんせいのさき  
尺ちあも、大佛きこひ六波羅  
二寸鏡かすもるぶはる京北景よ  
其目乃彩紙多くも懐中  
すも取中ねがまうの山乃雪清く

おハ坊主をくくひき赤れ色  
野良賞若のこ白じし梅乃花  
氣乃と鏡川多る意月北束  
新粒加トドけちるきれ霧散て  
ハさねく のかねこと乃輝  
カ心海らん善まうす清み紙  
二ひいこころる山  
雲鹿本刀肉そくしては川  
その比天物本葉ちりり

海より子よあつての骨とくを痛  
む気味やあつちを守はる板  
一のり七日満する精をとり  
急志あらぬ御開山様  
に利益の護りつよげせよと道々  
獅子の遠くもやからぬ時  
弓力ともろいきほひ大矢殺  
千里くみす急ハ八千  
めぐる月のあつちもちと多精留

雲ちぎれく横雲乃光  
一途乃よといもねむく此厚地色  
ウ 萩乃綿や丸くもろいぢ  
隼 鷹乃 ころあまの二番げん  
山と 二母と一野村系  
監、いごく刀、土倉き山もし  
西よハけ交 岸をき一ま  
「夕波や毎月二日暮すらん  
定舞子あま乃持舟

法

三

高砂地乃燈之れどく海下をいり  
廿一級家<sup>あう</sup>する松乃村立  
きしめり前後よりゆる中影  
大田寸代いりてまゝ人  
片便宜 西陣乃状いし  
無事さう命志のぐ波尻  
配家乃月かしてハたしじ雪墨<sup>クモリ</sup>  
ひろむる首題<sup>ニヒ</sup>妙理乃甚  
若るやる金枝衣けさ此髪

あゝ<sup>ケウカウ</sup>孫<sup>カウ</sup>徳<sup>カウ</sup>な目影かや  
腹そぬ心乃松くしる晴て  
梅<sup>ウメ</sup>しと又尻乃を<sup>シラ</sup>は  
世<sup>ヨ</sup>とれ 又まらづき中ふの

いそく袖乃露  
くねまの<sup>シラ</sup>礎  
下月更りて  
とらうと<sup>ト</sup>鶴<sup>ト</sup>乃声  
まに<sup>マ</sup>二<sup>ニ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>泉<sup>セン</sup>関<sup>カン</sup>此<sup>チ</sup>戸

来よんるも何肉の神

て心ちく乃交

十月日

中身兄がん

中身乃 意衣

江戸の石の山

教を 愚向と海へてこつ物よ

四年八卦の家甚乃声

為産別所別しそものけり乃

身神すもぬ人乃りたれ

借取も何るちなきうよ虫鳴そ

糸 一死一跡乃露乃露

その 報占来まれちるの露草

あふ 乃色よ月

何のたがもどか しいあまは雲

どややといつるよ蜀魂けい

交本まをんがた初まこよある

志いあむむしる昔乃思がぬ

名

かばらゆいさを守カキ見乃あまもト捕

わら乃さきうら山丸カ子カ病

あゝい髪ねき色カ尺寸カするカ方カ晴カて

首カ カのカ白カぞカさカりカ身

作カ カ寝乃木カ枕カよ

又 カ種カ於カ交カ干カ多カるカちカく

た カしカ道カ妹カうカゆカけカをカ吐カ途カて

額カ木カさカくカ一カ跡カ乃カうカけカりカ香

たカもカかカ毛カ毛カ若カれカさカきカふカのカうカ危

鼻カ強カゆカくカ弱カ美カハカ噴カ々カり

泥カ坊カがカふカげカ尾カをカくカ松カ乃カ尻

む カ丁カひカとカ何カ夕カさカ枕カ於カ病

跡カさカうカげカちカくカ涼カしカえ

龜カ根カハカ出カ何カ女カどカち

をカ カ経カとカ云カんカハカちカきカ寄カり

世カ名カ一カ一カワカ一カいカりカじカ人

多カ減カたカめカ志カしカ事カしカてカあカまカ合カた

家カうカのカめカてカ美カ月カやカあカふ

燒元乃海のくさけ守学さか  
おかし 年月や多くとさえは  
日影もあたふさき其れ其  
魚 心と正月

あやうい耳が純なりおとさ  
一白いふもと交山乃 雲  
あき城さあつ月此影き  
下物よし母の奥乃新  
赫立乃勢やくらいとさうん

常経



きりぎりすのこゝろに尾花の波よる  
大橋の東の川色をみる時ぐ乃好  
おのころの暮名夕月此の喜  
落霞のよるよと月のを  
海原のうらやむすのちんたぐび  
とね乃ちのまの晴さくともせの中よ  
身は清いと川まのげ道より  
下病病のりるあはれをいひて  
知言やよはよまびく是行

うさぎの遊中へすねる松乃鹿  
とてとははれぬまの白雲  
その車はあまのなる乃山を  
定ま乃集よ雪はあまの  
あえあまの山は宗甫の若と海  
四立のまのあ乃忘れ下風  
是れ香やちの宿よかよん  
まへごは腰乃柳のこころ  
其乃あまのれれ果はやりて

すまひちち意乃倒ハ際とさる  
おのつた月がーらよいあなあり  
氣みさごまゝぬ人乃新夕  
あむあむ法蓮華經をせこせ  
生死乃海北のうあひ此方ぬ  
黄金はけふくあやまわく風  
くむ乃小町を食ちあひり  
雲れ上ありし昔もさるまゝす  
声きく房や燈よりあたるん

あつ月にもふけんぞおれあ  
うきわくもあの一き力乃あ  
お道事恨つあする志葛原  
かす折紙乃筆は虫さく  
生ウサ瓜サ今つらとさあすさあ  
いさくーくもいさぐきねく  
ちとのるハワくへはあれあうや  
あ十年月城さあす新あ  
天命城志るやああを物あ

功成名と<sup>け</sup>げてお家の雪隠  
位立れ多別袋あをくられよ  
さるや一乃移やのさ守日記  
小ばうひ乃残うけ松を膝よんて  
膝まひうさる伴物の神風  
申し深さるるよてらす神月  
本やうれ声よさるう 雲霧  
るるあまのよくさびくちやさぬ  
かよふ荒うらまのぞとひし

師近きき方には道乃換小舟  
一流多ちうー浦波れ喜  
甲子此海林麻うちう此富全門流  
かすこ乃衣嵐色 ちう  
さね作やう持よるれある雪此肌  
志りうくさくもある甚乃凡  
又<sup>モク</sup>あを毛さきふああるぬえとけ  
態の越かすけいさんも思ふ  
火事トやとくあが偽乃まらうん

くまの書もなふつげの雲  
がのうらとねきある神れあが  
せまうあいてくれー涼風  
月白なうけかづく暮衣  
かゝるす乃そのまこ此卯花  
り  
足よ比糺をまよあがず箱根山  
悪前といひたこのすべ里及  
かきうきうきくひんまき世町  
三人四人あざ名めりすれ

及づまを又さる程よさる命よ  
ろ乃色このまよん年時て  
茶小級れたりてうらまの衣  
質乃れらう出ー勘苗  
比和寺イウツキムツキ五月ムツキ有彩すて  
ちうらね神をひらじ此声  
時まうて物乃器用又物の虎  
云候り門もくあまーな  
うはうあうあう及れあまを限

ひろい葉もとまきぞすくさ死名  
孫生山きつしははきく郭一公  
文盲なる前故乃多めえん  
あて字わく詞乃林雲此林  
け紫野 葉乃野よりなる  
彼知高いき杖ついでて一休  
きせぶをりとう唱とら声  
胸は痰はるゆの時を福をぬ  
はるいませー肉體乃あり

着た衣の男いでうらとまうなる  
あゝとくろくね大あれ海  
別後乃葉れ黒出石久して  
昔の履きき色ゆく志のくれを  
大工の屋日教わさひて入月よ  
やくそんよ葉統訓あ奴仇  
瘡毒乃たまうとあへずを教て  
ちんむとほしすね花乱を  
打碓あうらとらゆる藤の声

お色阿の取山川乃す急  
高根うはいと一筋川雲此  
雪をささふて風がりし  
内氣者志道とくさや白子尼  
多宿我打ち守朝乃 常

常能

ぞくりに残株よのくいで月戸長  
楊枝乃ささいよある香此露  
耳かゆしきけとや序のわらうん  
鳥乃上氣うらぬ肉乃う  
二六いうまを山とれりいせちるみ雲

わが中よりやよめるよーづき  
浮雲の志やうしげしるきよの如く  
山乃梅とこらつてあつくさるえ  
あれぞそ色子持すここの後の色  
こよよも先乃麻れつまこひ  
縁をぬぬいかなるまの縁ははて  
けさううがれとも早乃あま  
音れ月よのちわくともやがれ  
あが志かりてをさく郭公

和

十三

こらつてあつくさるえ  
こよよも先乃麻れつまこひ  
縁をぬぬいかなるまの縁ははて  
けさううがれとも早乃あま  
音れ月よのちわくともやがれ  
あが志かりてをさく郭公  
こらつてあつくさるえ  
こよよも先乃麻れつまこひ  
縁をぬぬいかなるまの縁ははて  
けさううがれとも早乃あま  
音れ月よのちわくともやがれ  
あが志かりてをさく郭公

和

道のかをこもればはくらたる事也

族芝居かふらぬが根をむし乃  
断は断乃末をむし葉はあ  
護摩堂乃嬾よからあまもを執り  
佛いるが傍にまよる事  
尊加快四中貴目球かぎりり  
ふせ乃等をはりる事を免る  
ある事をくちきはれし事を免る事也  
今もももともとよ双六乃石

ゆられてゑ乃揚屋をとちす事  
事理よつきりし事を免る事  
打もも守中の若木乃秘の葉  
所々やりへの事を免る事也  
門柱根をとりてす事也  
あまいてあまも乃あれ事也  
こももを免る事也  
世ともを免る事也  
まももを免る事也

十六



二六五の別ありてみざるし  
つまらざる誠恨もそそりて守り切  
ぬ悩ひいふいと菩提めぞ  
付心くらきまをかりる懐紙づ  
貞徳以後乃今時形露  
のまれうまよ釈ちるぬ虫此声  
さるくら借屋すあり月新  
人をまれぞごときふ花咲て  
月とともよの塔にば色梅

こよみの声ハ常ぬ多うず  
正月堂にありとやこころよ  
忍ぶ名と相乃さきあや立ぬん  
申へある軍人尺目をも社乞  
かこよある名も均死ぬことり  
現在乃果よるさきまはあり  
ゆよる愚痴乃眼は何とよ  
ろそそ乃まかありたれ守  
色好もみ移屋の門かよよ表

出

表

富田よりつけくつげきもが  
千経も七海がかるはよき人だ  
いっちのういっち 福家乃意  
あびぬとふよくそごが月此雲  
あまこいおたれりきハまき方  
智義せんやまの梅うすの如  
横川とつけて山やひえらん  
小使乃親きあすまハ海乃海  
屋と目乃やあをまあがす白浪

きぬをれよ春の山吹色ちかき  
ぬらんあく乃すま色の地  
昔はし妹がから物かす母し  
うーとくこよよ相性乃すま  
ひらまのいぬが愛がぬよ心  
引息はうきさうらふ乃意  
見る月よ三重乃ゆまちがくと  
本我乃く人麻をく 喜  
あまあむむしび常哉志あをて

さしぞ乃わ色甚乃新戸出  
多る深白いころくう守處  
勅尚せし色申くす急此雲  
小ぬきころ塵がほりて山より  
いさご長して石川乃何  
作あるれきの待よむすぶ苔此處  
丸相乃をもそや野に虫乃喜  
是る花雪よ嵐乃好きて  
まへ繁れむ西影此月

わき何れ移香少きぐ旅程  
かくとらむをまん末乃さき  
少くくどもをまれぬ中越移ぐい  
千代りといのち葉吟す家  
大いこころしき事此ちきき  
捨て世る越よ山の山住  
空あれを本陰と宿よ構いと  
ころりまといけてハ蝶く乃夏  
其も今百年月と名浦を枝葉

多と親ずきをどきとさう也  
江乃本と重はまね舟うすは  
何やうひろよ芦乃多あぐれ  
神はくまのといきる松乃風  
むさ先さきよ孫のよれさき

糸雨子  
常能

る下踏やひをどきあぐす厚少  
杖はのちうて雪を色れ行  
本枯や古家老白成ぬらん  
一里う川ある末乃よき雲  
白此心多ぬやうも厚れ色  
先乃る雨あききき

今日よりあかりう物云音をんて  
かんどん乃うんつつけ張乃露  
たきある鼻よ不審やのころん  
をぬがけへてや君乃おもうげ  
海まよ志かゞとなつて別あり  
おげをよひびくかね行くなる  
そ粒が惱乃爰目がさめて  
葉を乃はてやまづむ心便  
世中の勅世能能乃かりき

お人むうりやをらきさきさざり  
のぼる大江山と道さる  
まよ梅もとえぬすねれ下露  
こと葉はるういなるん虫は声  
よらうをてある葉中乃眼  
一さうし時殺乃跡能花ちて  
方丈乃紀よのころ守甚凡  
しするは梅葉好乃夕まがめ  
師直が威乃いしやせ実を

今初辰大ニ暮ク一西ノミ  
是天下一山也一其  
晨唱やてんがうぐま此へ乃字豪  
かゝる物乃権能 榜旁  
すでまもや一導すんで野への森  
刀けく一尾雪こく  
吾賣が神くくりや一松乃色  
そのくまはもつて雪北アケボノ曙  
よの中此兼理とも埋むまの雪  
念者乃移すかふた  
よ心者誠吹あきくまの丸  
よくさ紙やめく若よ白よ梅  
入たらくか世し夜きえてく  
くまう葉乃あとい月日新  
を自ぐぬ南蠻流く故乃山  
料理よ一あまき麻ぞゆき  
今やまんにあま梅もつを移客乃  
やよ新あし一庭此塵をけ

世

世

冬籠り腰ぬきわぎ乃虫ぬせり  
秋もろくはくもく嬢控の山  
喰のく一盃かぬく食椀を  
茶盆をくくそく辛気わくせる  
竹乃穴吹息くくもく木のたひ  
色よかんとくや寸ぐくくも借  
茶よくもき肉や飲と福くぬん  
眉乃乃虫サ一尺乃一尺  
三  
其白山見くく入道夕かすも

扱ひくくもくの飛虫野乃末  
吉徳やぎや川とく子声ぬく川至  
時く鳥がくをゆやとく  
藤花肉乃さすめて釣ぼくけ  
空流乃川旁もくや末此さけ  
歌くもくもくせる法師が袈乃月  
番盤乃所もくもくちみくく  
蛇と吹かまどめく此窟山  
串柿くく人猿くけくん

海老とよのはらりたる鶴の肴  
は 大 筈 以 ち 正 月  
砂 時 討 下 ち 乃 之 す 甚 此 作  
敵 乃 我 ぞ 摩 乃 乃 乃  
与 んと せ せ 世 王 持 せ 下  
川 之 竹 乃 性 乃 乃 果  
方 乃 之 成 申 玉 乃 飛 雲  
一 亂 以 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
軍 人 汝 今 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
町 乃 乃 事 乃 乃 又 乃 乃 乃  
菓 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
之 文 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
生 捕 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
胎 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
和 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
村 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
蚊 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
風 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃



名  
黒胡麻やうはう番二層の神代露  
うきよの向草あへるもの  
くら蓋よらぬハ父母ある生身玉  
あゝ一途世なる月く一 村雲  
星乃中る毎が法界恪氣一て  
さきもいづちうもさうた  
校さる松乃ゆくをすうこは  
うはわかまがこ白妙乃ゆふ  
はう中と一層んいける家全た雲

ちんぞはいしてあゝが  
おきて鞭打るとさ  
又まけは垂びんがうき  
幡燭やさあこれきうた  
ああうとをうき形以此切徳  
尻もちろみ越さる事さう  
る一毎をうれしをが寝不  
神頃やうさうれ乃意代  
ゆ一あるや代盛人さう

結

結

色二のい書よりきりめえ又曰  
酒いりりともいさぬぐり  
歴々と花乃おもりんる陰よ  
ひらんまりきり城さきり人

地ふみ交あづこぬんざり  
る下踏をさしし大吉  
あきそ石のいさし  
あ川きん俳諧乃大珍  
文より武あゝそのやう白  
乃おもかゝかるわぎさわ  
りざとんぬる白ちのよ  
てそのい志建ぬ又艶き  
心ざん城うゝんむ子親

乃つ声よ身越えさぐひ  
月越ねのよとそへ松う  
のこしとあうしれもふげ  
ををうれあうすべて  
西面韻その神いとみな  
らずあそふよわつてふ  
凡流ハ南世乃らぬが中  
空を此あふあまのいと  
こは風月乃た

どち道だちるしどし  
かりきうらさか  
ともよあ越えよあすの  
石越と志ふんづ

谷口  
重以独吟

のきりて一向よそねや馬声  
野山乃鹿をひんみぎる草  
畑時あむよそ越えよあ越え

緑青く清す春乃下露六  
弱障乃ひびきも滑けさの月  
淡吹すくく 鯨とちりまを  
愠曇茶梳乃由をふかよし  
清ハ摺鉢く川少けよらん  
さう中こハ糊乃粟下であじよま  
う色乾坤ハさるまねきよま  
高法師よ又行も四季よひき  
さてけこ色ハ養老薬さく

鮫浪よんせよことそあ船鹿  
お侍存るぬるる家さく  
淡陽乃そのねとあぐる子親  
寝ねお銭あうす行灯乃下モト  
思ひ子よあし丸銭とあじよま  
娘よりさき此舟縁よりとも  
加賀米と夕乃殺ハ露よまん  
かかあ常を月よととるや  
花とるて誰神少道かぞせぞや

世

六三

山吹ころもかぢけきのみす  
二 笠もあるといふどころ入らず一處  
鬼と何り色にすうきあとも  
借部乃測の地獄よこ  
特要の暗や立山白山  
了こころあは枝種うけて  
たりの乃なるんれ彼出ぬ  
たもこころあはかりるき契  
後うそんでふる色と死んどの

世とててサ知年の暮るなり  
あまのいハるいぐ家よ志のとな  
内氣者轉のよものやれん  
けしむる稽乃中人とがま  
表白一とふくよなるまもこ  
さえゆくかおれつむ松原  
お初種ハ草芳野三痛弱殿  
徳新成能乃益嘆まけり  
さあ天下千代るん松れ甚るん

るんくらう坊乃婦らす東風色  
去年此雪比散ヒははりて百影ヒ  
むね鼻角よりちうふ富を此根  
よのほし代垢離を加ちりりり  
あ換時疫乃蛇乃夕ぐれ  
測せまるぞんぐくことつしや  
蛇ニすちるるくんのす雲雲  
くぞめうま月乃盃そこねけが  
氣乃とゆらつめるまをなほし

あびきよる中ハ矢殺乃金此ざん  
ぬれとかいしてかいなニりや  
甲比結まきす壇壇より飛飛をりり  
氣やせう色色ある須弥乃韋路天  
泉涌寺乃三物物まほき出し  
山ハいありれ落葉落葉種志く  
糸商持とのやさきひて芳がくま  
小宮接婦人より乃殿系  
今乃くさいり色ね月此さよ衣

中

衣

すそびんがくろなる如とほ  
元帳乃かせんしやふあひめ  
いふふと原氏たま乃わく  
猿眼むし歯さつてよふれ  
中肉乃すくさきたまさ  
素たま乃陰と丸ね色袖乃  
重なるひうてぐらうく  
何々なるうへ心乃ゆま  
るんむがつかまよ乃声

きよなるか蛇をほし腰り  
玉銭あがむくよあ年の  
暮たま何ふ露我月乃内  
蔭生々小野乃ものより  
道乃脈乃下なる等は虫  
冠カフあしつ 猫とわ月  
蓋かゆの黒おきたま乃袖  
帯細とつて海ドリうハ  
湯尻島と入や首げ思ひ

ありきと申すは其の事  
申すに申すは其の事  
乃乃若きれば其の事  
野路に末葉物つてせしめ  
病及ハ其乃山のすし  
そりそそのさるやよ  
出多礼日乃ひいりさす  
對面亦多陸にむく  
悉くありぬるの勢至勝

申すに申すは其の事  
乃乃若きれば其の事  
野路に末葉物つてせしめ  
病及ハ其乃山のすし  
そりそそのさるやよ  
出多礼日乃ひいりさす  
對面亦多陸にむく  
悉くありぬるの勢至勝  
申すに申すは其の事  
乃乃若きれば其の事  
野路に末葉物つてせしめ  
病及ハ其乃山のすし  
そりそそのさるやよ  
出多礼日乃ひいりさす  
對面亦多陸にむく  
悉くありぬるの勢至勝



神少うけつてねえうけてん  
乱急少修乃あまれ事あり  
さしハこまて越泊舟よりま  
生急乃こす多よする客い  
三尺六寸板乃多うう  
其うけつてものが刀越とま  
多しひりる多勝和乃月

寺所ニ系上町

井筒公在善湯板

